

Topics ■トピックス [学内情報]

次代を担う若者を全面的にバックアップ！

関西大学のキャリア形成・就職活動支援体制

昨年の倫理憲章の改定により、企業の採用情報公開が例年より2ヵ月遅れの12月開始となった。ところが、採用選考の開始は従来通りの4月以降であり、それに先立つエントリーシートなど応募書類の提出も例年通りのスケジュールで進められており、学生にとっては具体的な応募先を検討する時間が短縮化されている。そのような状況においても学生一人ひとりが将来にしっかりとした目標をもって挑むために、関西大学キャリアセンターではさまざまな支援を展開している。

◎全キャンパスでの展開

キャリアセンターでは、3・4年次生の就職指導にとどまらず、1年次生から段階的に自分の将来を描き、自ら進路を導き出すために、千里山キャンパスを拠点に高槻・高槻ミューズ・堺の各キャンパスに分室を設けて、キャリアプランニングセミナーなど多彩なサポートプログラムを展開している。また、理工系学部ではキャリアセンター理工系事務室がその役割を担っている。

◎個別対応のキャリアカウンセリング



関西大学ではキャリアセンター内にキャリアデザインルームを設けて専門カウンセラーを配置し、学生一人ひとりのキャリアカウンセリングを展開しており、既に10年の歴史を迎えようとしている。現在では、さらにキャリアセンター事務室にも就職専門相談員を配置して、日常的な就職活動のさまざまな相談に随時応じている。

◎充実したインターンシップ制度

学生が段階的に進路を探索するうえで非常に有効な取り組みがインターンシップである。特にキャリアセンターが取り組むビジネス・インターンシップでは、例年270を超える企業・団体等で約500名の学生が就業体験を行っている。国内はもとよりグローバル人材養成に積極的に取り組むために、米国のロサンゼルスやサンフランシスコ、ミズーリ州での国際インターンシップも実施している。

◎多彩な就職支援プログラム

初歩的な就職活動に関する心構えから、具体的な業界・企業研究の方法に至るまで、多彩なプログラムを3年次生以降に提供している。特にその時の経済環境や社会状況の分析をもとにした業界研究や企業研究について指南する就職対策講座のシリーズ企画は、学生に絶大な支持を得ている。もちろん、就職模擬面接や各種就職模擬試験も実施している。



◎業界研究会

具体的な応募先の企業を選ぶ前に、現代の産業社会構造を知り、各産業界がどのような機能と役割を担って、未来に向けて何に挑戦しようとしているかを理解することは、進路選択において重要である。関西大学では、倫理憲章の趣旨に沿って、採用情報の提供とは一切切り離れた内容で、キャリア教育の一環として全学年の学生を対象に、各産業の代表企業の協力を仰いで秋に実施している。

◎学内企業研究会・合同企業研究会

企業の採用情報公開解禁とともに、例年学内に約150社のリーディングカンパニーを招いて各社の業務内容や採用情報、企業としてのメッセージ等を学生に講演していただく学内企業研究会を開催している。さらに「関大生を求める企業」と「優良企業への就職を求める学生」の出会いの場として、ブース形式での合同企業研究会を2月に大規模に開催し、その後も5月から11月にかけて時宜に応じて延べ1,000社を超える企業の協力を得て開催している。



◎公務員等志望者支援行事

公務員を志望している学生に対して、10月に「公務員ガイド」を開催。11月には人事院担当者による「国家公務員採用試験説明会」、合格者による「公務員試験合格体験報告会」を開催している。さらに12月には実際に公務員として活躍中の卒業生を招いての「仕事研究セミナー（公務員編）」をはじめ各団体等による「公務員業務説明会」、各省庁担当者による「人事院主催・国家公務員関連イベント」も学内で開催して公務員志望者の支援を展開している。

◎KICSS(関西大学インターネットキャリア支援システム)

KICSSは、関大生限定の就職・進路支援サイト。企業から関大生への求人が検索できるほか、OB・OG情報、各種セミナー案内、インターンシップ、公務員試験などに関する多種多様な情報を発信している。7・8ページで紹介されている関大生に特化した職業適性・興味検査の「CAPシステム」ともリンクしており、関大生にとっての就職活動必須ツールだ。

昭和基地からライブで「南極授業」

関大一中・東野教諭が南極の驚異と魅力を伝える



第53次日本南極地域観測隊夏隊に同行した関西大学第一中学校の東野智瑞子教諭が、千里山キャンパスで1月26日、28日に、南極昭和基地から衛星放送によるライブ授業を行った。リアルタイムの映像を伴った授業に参加したのは、関西大学第一中学校、関西大学中等部、関西大学北陽中学校の生徒たち。その模様を紹介しよう。



◀東野智瑞子教諭 (南極昭和基地前で撮影)

*リアルタイムで南極を感じる授業

関西大学第一中学校で理科を教えている東野智瑞子教諭は、第53次日本南極地域観測隊夏隊の同行者として、2011年11月25日に日本を出発した。

今回の「南極授業」は、国立極地研究所が文部科学省と連携して実施する教員南極派遣プログラムに、南極の温暖化に興味を持っていた東野教諭が応募し、採用されたことにより実現した。授業は、南極昭和基地と関西大学BIGホール100とを結ぶ衛星回線のTV会議システムを利用して行われた。

1月26日には、関西大学第一中学校の生徒約700人が参加。1月28日には、関西大学中等部、関西大学北陽中学校、および吹田市内の中学校の生徒、約500人が参加した。

26日の授業は、「今日は演出かというぐらい、めっちゃ南極っぽい天気です」と、強い風の中に立つ東野先生の姿と声で始まった。東野先生が戸外から管理棟の中に移動する間、日本を出発して南極に着くまでの様子を伝える映像が流れた。

授業では、昭和基地と関大一中との位置関係から、南極が夜中まで明るいのはなぜかを解説。続いて、昭和基地での一日の生活、設営作業、オゾンや大気中の成分、重力などの観測について説明。圧巻は、東野先生が同行したペンギン調査と湖沼調査。最後に、生徒たちからの質問にも答え、未知の世界である南極の驚異と魅力が十分伝わる授業となった。



リアルタイムで実施された「南極授業」

*ペンギン調査・湖沼調査に同行

ペンギン調査のシーンでは、生徒たちから「うわー、すごい」「かわいい」という声が上がった。ペンギンは小石を積み上げて巣を作り、雛は口移して餌をもらう。卵や雛が巣からこぼれ落ちると、天敵のトウカモ(ナンキョクオオトウゾクカモメ)にやられてしまう。

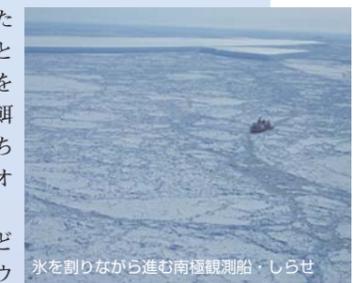
「雛が奪われていくのを見ると、ひどいなあという感じがするけれど、トウカモにとっても、餌を食べられるかどうか、生きるか死ぬかの瀬戸際なので、自然の厳しさを感じます」と東野先生。

湖沼調査では、南極に生きる生命と悠久の時間について語った。

「湖のほとりにアザラシの赤ちゃんと思われるミイラが横たわっていて、周りを優しく緑色のコケたちが取り囲んでいる様子がすごくきれいで印象的でした。南極では菌が繁殖しにくいので腐敗が進みません。アザラシからの命をちゃんと受け取って生きているコケたちを見ていると、こうやって命がバトンタッチされていくのかなあということを感じました。アザラシがいたということはこの辺は海だったのかなと考えたり、このコケたちがいつ生え出したのかと考えていると、人間の生きているちっぽけなスケールでは計れないくらい、すごいスケールの大きさを感じました」

東野先生の親しみやすい授業を受けて、生徒たちは南極の厳しい環境と生物の暮らしに思いを巡らせたようだ。

「この時間では言い尽くせないほどたくさんさんのことがあったので、あとは日本に帰ってから伝えていきたいと思っています」東野先生は、3月19日に帰国する予定だ。



氷を割りながら進む南極観測船・しらせ